人づてに連絡先を教えてから初めて、田中から連絡が来た。
久しぶりに見るその名前に、一瞬間を置いてタケノコ、と思う。
メッセージを開けると、やっぱりタケノコだった。
ごぶさたしてます。今度の土曜タケノコ掘り、来ますか？
小島さんの知っている高橋は来ます。田中
行く。何時？
5分くらいで返事が来る。
電車からバスから詳細な時間と、10時17分のバスを逃すと1時間バスが来ないこと、バス停から家までの道のり、表札が見えないが気にしないこと、汚れてもいい格好で足元はスニーカーで、という長文の指示が来て、親切というより慣れてるなあ、毎回コピペしてるんじゃないかと思い、いやいや田中だからちがうか、しかし朝10時17分にあんな果てにある駅か…ととりとめなく浮かんだ最後に、ようやく番が来たか、とうっすらうれしくなる。
おそらくうれしさの7割はタケノコ成分で、3割が田中だ、たぶん。
すっかりタケノコ掘りモードになってしまったが明日も仕事だ。
布団に入ったものの、タケノコごはん用におあげ買わなきゃな、わかめはあるし、とタケノコに思いを馳せてなかなか眠れなかった。とにかく、ほんとにほんとの掘りたてのタケノコが食べられるのだ。
隣のパーティションの向こうに田中が座っていて、これ夢だ、とわかる。
田中が隣に座るのは、店だけだ。
田中は同じフロアだけどぜんぜん関係ない部署の人だった。システムなんとか的な、こう言ってはなんだがもさっとしたというか、小太りで絶対休日はチェックのシャツ着て秋葉原にいそうな口数が少ないタイプか、打てば響くというより

単に攻撃的でイチ話すと自分本位の話を１０００くらい一方的にしてくるタイプが固まった部署。
異世界すぎて、個別認識していなかった。目を合わせる人も少ないし、まれに何か確認とかすることがあっても、同じフロアだけどメールで訊いてメールで答えてもらう始末。
だから、最初は田中に気がつかなかったのだ。
会社の人はまず来ない（会社の近くといえば近くなのだが、雰囲気的に。会社の人が行くのは赤のれんぽい激安店か、女の子ウケのいいわかりやすくかっこつけた店か、宴会用のどうでもいい大型店だ）裏通りをいくつか入ったところにある店。
どの駅からも遠くて、やっているときしか看板が出ていないので、認識している人しか来ない。
たまたま帰り道に一駅歩くようになってから店だと気がついた。
最初は入るつもりはなくて、横目で見ているだけだった。
そもそも一駅歩いているのもせめてもの運動のためで、のんだらだいなしである。
入ったのは、運動（というかダイエット）がどうでもよくなったころ、前を通るようになってから半年くらい経っていた。
よくある話だが、親密だと思っていた人にもっと親密な人（というか妊娠中の妻）がいることを本人以外から教えてもらい、なんだそれ、人を見る目がないにもほどがある、ということがわかった日だった。
べつに、どうにかなりたいとか、思っていたわけではないのだが。
嘘つき！　と責めてみっともなくないほどの若さもなく（だから相手にとって都合がよかったのだろう）、それなりにたのしんだからまあいいか、しかしへこむものはへこむ、だがしかし誰かに泣きつくのももはやめんどうで、手っ取り早く酔いたかった。
知っている人がいないところで。とにかく、のもう。
入ってみたら、薄暗い。
なんとなくしまった、と思うがもう遅い。カウンターもふたりしか座っておらず、空いている。
お客としゃべっていた店の人が、こちらを見、にこっとした。

「お好きな席にどうぞ。」
入り口がわの、ひときわ暗い端に座る。
手前のカウンターだけの店ではなく、意外に奥があった。テーブル席があるようで、何人かいるような声がする。
太らなさそうな酒を頼もうとして、もう必要ないことを思い出す。
「白穂の香を。」
初めての店なので、女子っぽいビールにする。
(自分でもなぜだかわからない見栄?)
香りが華やかで一杯めには最適。
おいしいなあ。おいしく感じるから大丈夫だ。うん。
ひとりでのむと、することがないので、すぐのんでしまう。
ずけずけと話しかけてこなくて、いい店だ。たまに、何かの相談所に来ちゃったかと思うくらいいろいろ訊いてくる店もあるが、ああいうのは好きじゃない。

ちゃんとした食べ物もあるようだし、グラスのワインの白を頼む。
また聞きだが、フランス人はまず白をのみ、追って赤をのむ。赤のあとは絶対に白をのまないらしい。それを知ってから、一応敬意を表して白からのむようにしている。
どんなワインかな、と見るともなく見ていたら、ちょうどグラス用のボトルが終わったところで、口開けのものが注がれた。ついてる。
グラス用のワインがどれくらいおいしいかで、いい店かどうかわかると思っているのだけれど、ここはあたり。
ひどいところは、飛行機のエコノミークラスで出るワインみたいな味がする。

ピクルスを頼もうとして、ほんの半年ほどのあいだにカロリーを気にする習慣が身にしみてしまっている自分をいまいましく思いながら、ラザニアを頼んだ。
あー、チーズたっぷりでオイリーで、夜中食べたら太りそう。ざまあみろ。
太るのは自分なのに、なぜかざまあみろという気持ち。
ラザニアを待っている間に白は終わってしまった。

赤を頼むと、小皿にのったゆで栗が三粒出てきた。栗?
「お客様にいただいたので、よかったらどうぞ。」
「あ、どうも…。」

あんまり甘くないけど、ほこほこしている。なんというか、栗ごはんに入っている栗っぽい。
「庭のだから、たいして甘くないんですよ。」
店の人じゃない。薄暗いのでよく見えないが、カウンターの男らしい。
「庭って…あんな遠くの敷地にあるのに。畑でしょ。」とぞんざいに店の人。
よく知った間柄のようで、なれなれしいというよりはほんとうに親しいようだ。
「たいして手入れしてないから庭だよ。」
いや、庭こそ手入れしているから庭では、近くに小川もあるよね、あんな小川らしい小川ってお前のとこで初めて見た、ととりとめなく話は続く。

男の家はちょっとした地主らしい。
地主って知りあったことないな、やっぱり昔庄屋とかで、何百年と続いていて、まわりじゅう同じ名字だったりするんだろうか。
転勤が多い家だったから、どうも土地に根ざしたものに弱い。自分とちがってゆるぎない確固としたものがある気がする。

今からではどうにもしようがない、ちょっとした憧れだ。
たいしてのんでいないので酔った勢いではなく、純粋に好奇心がわいた。
「蔵とかあったりするんですか。」
急に会話に入ってみる。
「蔵はないけど、大八車の車輪はありますよ。」
蔵と大八車の車輪にはなんの共通点もないと思うが。
彼の中では昔のもの、として同じカテゴリなのだろう。
「要するに、百姓ですよ。」とほがらかに言う。
高くも低くも印象に残る声質でもなく、明るくぼさっとした声で、へんにおかしみがある。すなおに育ったんだろうなあという感じ。
「名前も田中だし。」
なるほど。
「覚えやすいですね。」
「…そうですか?」
言い始めの前の「…」がすこし引っかかったが、ラザニアが来たのでラザニアに集中する。
きっと食べ物もおいしいんじゃないかと予感がしていたが、

おいしい。
ほうれん草も入っている。ちゃんと作られたものは、いいなあ。
やけどしないように気をつけていたつもりが、上あごはやっぱりべろべろになってしまった。赤がしみる。
のんだらなじむかと思って、もう一杯頼んだがしみるだけだった。
やんわりと酔いがまわってくる。

帰るか。
と思ったら「じゃあそろそろお会計を。」と田中が言った。
口をつぐんで、田中の会計が終わるのを待つ。
出る前に「お先に失礼します。」と言う田中を間近で見たら、ぽっちゃり寄りの中肉中背で、声に似つかわしいほのぼのとした顔をしていた。
会釈をし、「わたしもお会計を。」と頼む。まあ妥当な額で、当然栗代もとられていなかった。
「またぜひいらしてください。」
店の人に深くおじぎされる。
店を出て、今日はなかなかいい日だったな、と思い、そう思えたのがうれしかった。
いい感じで始末がついた気持ち。
たのしい余韻だけで自分を満たして、もやもやした気持ちにフタをする。
少しずつそういうことができるようになった。41だなんて、ずいぶん遠くに来たもんだけど、悪くないこともある。

その後も何回も店に行くのだが、ずっと田中が同じフロアの人だとは気がつかなかった。
何回めに気づいたのだったか、急にわかったのだ。びっくりした。
わかってみると気になって、訊いてみた。
「わたしのこと、最初から認識していた？」
「はい…小島さん、声が大きいから、知っていました。」
「早く言ってよ！」
「いや、会社の外で会社のこと言われたくないのかなと思って。」
「まあね。」
そう言われると、確かに言われないほうがいい。もっさりしてるのにこいつやるな、と思った。

はしっこい人間より、もったりしている人間のほうがなんだかんだ最終的に笑う立場になるんじゃないか。
ちゅうとはんぱに要領がいいのがいちばん始末がわるい、と自分を反省する。

田中が、十把一からげの「あっちの人」の一員だとわかったあとも、田中の態度は変わらなかった。
おだやかで淡々として、ちゃんと敬語。
わたしが年上だからというのもあるようだけど、いつも丁寧な物言いだ。
店で会うとしゃべるようになったが会社では話しかけてこない。すれちがうときに親密すぎない程度に感じのよい、ほかの人が見てもへんに勘ぐられないふつうの会釈をしてくるくらいだ。
田中を認識したあとに「あっちの人たち」を見ると、ほかの人もすこしだけ個別認識できるようになった。
意外とメガネの奥の目がつぶらな人がいたり、中にはやせぎみの人もいたり、田中とたのしそうに話す輩（わたしには超感じ悪い）もいたり。
ちょっと世界が広がったかもしれない。広げるつもりがなかった部分だけれども。田中を認識したことで、少し会社の居ごこちがよくなったような気がした。

クリスマスって、こんな商業主義に踊らされるのはほんとうにばかばかしいと思うのに、まるで関係ないと否応なくさみしい気持ちにさせられる。
子どものころから刷り込まれすぎているのかもしれない。
たのしそうな人びとを見ると、すなおによかったねえと思う程度には社会性（ではないかもしれない。人情？）がある。

もちろん行くところもなくて、まっすぐ家に帰るのもなんなので店に行ったら、定時で出たはず（どうするのかとちょっと気になって動向を見ていたのだ）の田中がいた。
「モデルとごはんに行ったのに、帰ってきたんだって。このヘタレ！」
店の人が教えてくれる。
モデル！　なぜ田中がモデルと。
田中をあなどるような失礼な感情と、置いてけぼりにされたような気持ちがないまぜにやってくる。
「別にそんなのじゃないし…。サイトの手伝いしただけで。」